評論・随想……二

# 陰翳礼讃

谷崎潤一郎

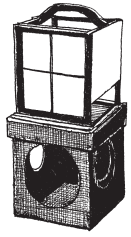
京都に「わらんじや」という有名な料理屋があって、ここの家では近頃まで客間に電灯をともさず、古風な燭台[1]を使うのが名物になっていたが、ことしの春、久しぶりで行ってみると、いつの間にか行灯[2]式の電灯を使うようになっている。いつからこうしたのかと聞くと、去年からこれにいたしました、蠟燭の灯ではあまり暗すぎるとおっしゃるお客様が多いものでござりますから、よんどころなくこういうふうにいたしましたが、やはり昔のままのほうがよいとおっしゃるお方には、燭台を持ってまいりますと言う。で、せっかくそれを楽しみにして来たのであるから、燭台に替えてもらったが、その時私が感じたのは、日本の漂器の美しさは、そういうぼんやりした薄明かりの中に置いてこそ、初めてほんとうに発揮されるということであった。「わらんじや」の座敷というのは四畳半ぐらいのこぢんまりした茶席であって、床柱や天井なども黒光りに光っているから、行灯式の電灯でももちろん暗い感じがする。が、それをいっそう暗い燭台に改めて、その穂のゆらゆらとまたたく陰にある膳や椀を見つめていると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今までとは違った魅力を帯び出してくるのを発見する。そしてわれわれの祖先が漂という塗料を見いだし、それを塗った器物の色沢に愛着を覚えたことの偶然[1]でないのを知るのである。友人サバルワル君の話に、インドでは現在でも食器に陶器を使うことを卑しみ、多くは塗り物を用いるという。われわれはその反対に、茶事とか、儀式とかの場合でなければ、膳と吸い物椀のほかはほとんど陶器ばかりを用い、漂器というと、やぼくさい、雅味のないものにされてしまっているが、それは一つには、採光や照明の設備がもたらした「明るさ」のせいではないであろうか。事実、「闇」を条件に入れなければ漂器の美しさは考えられないと言っていい。今日では白漂というようなものもできたけれども、昔からある漂器の肌は、黒か、茶か、赤であって、それは幾重もの「闇」が堆積した色であり、周囲を包む暗黒の中から必然的に生まれ出たもののように思える。派手な蒔絵[3]などを施したピカピカ光る蠟塗りの手箱とか、文台とか、棚とかを見ると、いかにもケバケバしくて落ち着きがなく、俗悪にさえ思えることがあるけれども、もしそれらの器物を取り囲む空白を真っ黒な闇で塗り潰し、太陽や電灯の光線に代えるに一点の灯明か蠟燭の明かりにしてみたまえ、たちま

江戸時代の蒔絵（尾形光琳「八橋蒔絵硯箱」）

**谷崎潤一郎**　一八八六（明治一九）―一九六五（昭和四〇）年。小説家。東京都生まれ。耽美的世界を描いて文名を得、後に古典文化に傾倒した。作品に『刺青』『春琴抄』『細雪』などのほか、『源氏物語』の現代語訳がある。この文章は一九三三年に発表されたもので、本文は「谷崎潤一郎全集」第二〇巻によった。

**1 燭台**　蠟燭を立てて火をともす台。

**2 行灯**　木や竹の枠に紙を貼り、中に油皿を据えて火をともす照明具。



**1**「偶然でない」とはどのようなことか。

**3 蒔絵**　金粉・銀粉・螺鈿などで、漂器の表面に絵模様などを描く工芸。

〈発揮〉〈茶席〉〈色沢〉
＊よんどころない
＊雅味のない

ちそのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重々しいものになるであろう。古の工芸家がそれらの器に漆を塗り、蒔絵を画く時は、必ずそういう暗い部屋を頭に置き、乏しい光の中における効果をねらったのに違いなく、金色を贅沢に使ったりしたのも、それが闇に浮かび出る具合や、灯火を反射する加減を考慮したものと察せられる。つまり金蒔絵は明るい所で一度にぱっとその全体を見るものではなく、暗い所でいろいろの部分がときどき少しずつ底光りするのを見るようにできているのであって、豪華絢爛な模様の大半を闇に隠してしまっているのが、言い知れぬ余情を催すのである。そして、あのピカピカ光る肌のつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、静かな部屋にもおりおり風のおとずれのあることを教えて、そぞろに人を瞑想に誘い込む。もしあの陰鬱な室内に漆器というものがなかったなら、蠟燭や灯明の醸し出す怪しい光の夢の世界が、その灯のはためきが打っている夜の脈搏が、どんなに魅力を減殺されることであろう。まことにそれは、畳の上に幾すじもの小川が流れ、池水がたたえられているごとく、一つの灯影をここかしこにとらえて、細く、かそけく、ちらちらと伝えながら、夜[2]そのものに蒔絵をしたような綾を織り出す。けだし食器としては陶器も悪くないけれども、陶器には漆器のような陰翳がなく、深みがない。陶器は手に触れると重く冷たく、しかも熱を伝えることが早いので熱いものを盛るのに不便であり、その上カチカチという音がするが、漆器は手ざわりが軽く、柔らかで、耳につくほどの

[2]「夜そのものに蒔絵をしたような」とはどのようなことか。



音を立てない。私は、吸い物椀を手に持った時の、手のひらが受ける汁の重みの感覚と、生あたたかい温味とを何よりも好む。それは生まれたての赤ん坊のぷよぷよした肉体を支えたような感じでもある。吸い物椀に今も塗り物が用いられるのは全く理由のあることであって、陶器の入れ物ではあはいかない。第一、蓋を取った時に、陶器では中にある汁の身や色合いが皆見えてしまう。漆器の椀のいいことは、まずその蓋を取って、口に持っていくまでの間、暗い奥深い底のほうに、容器の色とほとんど違わない液体が音もなくよどんでいるのを眺めた瞬間の気持ちである。人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることはできないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上に感じ、椀の縁がほんのり汗をかいているので、そこから湯気が立ち昇りつつあることを知り、その湯気が運ぶ匂いによって口に含む前にぼんやり味わいを予覚する。その瞬間の心持ち、スープを浅い白ちゃけた皿に入れて出す西洋流に比べてなんという相違か。[3]それは一種の神秘であり、禅味[4]であるとも言えなくはない。

私は、吸い物椀を前にして、椀がかすかに耳の奥へ沁むようにジイと鳴っている、あの遠い虫の音のようなおとを聴きつつこれから食べるものの味わいに思いをひそめる時、いつも自分が三昧境[5]にひき入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎるおとに尾上[6]の松風を連想しながら無我*の境に入るというのも、恐らくそれに似た心持ちなのであろう。日

[3]「それ」は何をさすか。

4 **禅味**　世俗を離れた枯淡な趣。

5 **三昧境**　物事に没頭している忘我の境地。

6 **尾上**　兵庫県加古川市の加古川河口東岸の地名。尾上神社境内の松で知られる。歌枕の一つ。

〈反射〉〈減殺〉〈灯影〉

＊余情を催す

＊無我の境

本の料理は食うものでなくて見るものだと言われるが、こういう場合、私は見るものである以上に瞑想するものであると言おう。そうしてそれは、闇にまたたく蠟燭の灯と漆の器とが合奏する無言の音楽の作用なのである。かつて漱石[7]先生は『草枕』の中で羊羹の色を賛美しておられたことがあったが、そういえばあの色などはやはり瞑想的[4]ではないか。玉のように半透明に曇った肌が、奥のほうまで日の光を吸い取って夢みるごときほの明るさを含んでいる感じ、あの色合いの深さ、複雑さは、西洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどはあれに比べるとなんという浅はかさ、単純さであろう。だがその羊羹の色合いも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑らかなものを口中に含む時、あたかも室内の暗黒が一個の甘い塊になって舌の先でとけるのを感じ、ほんとうはそううまくない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う。けだし料理の色合いはどこの国でも食器の色や壁の色と調和するように工夫されているのであろうが、日本料理は明るい所で白っちゃけた器で食べてはたしかに食欲が半減する。たとえばわれわれが毎朝食べる赤味噌の汁なども、あの色を考えると、昔の薄暗い家の中で発達したものであることが分かる。私はある茶会に呼ばれて味噌汁を出されたことがあったが、いつもはなんでもなく食べていたあのどろどろの赤土色をした汁が、おぼつかない蠟燭の明かりの下で、黒漆の椀によどんでいるのを見ると、実に深みのある、うまそうな色をしているのであった。そのほか醤油などにしても、上方では刺し身や漬物やおひたしには濃い口の「たまり」を使うが、あのねっとりとしたつやのある汁がいかに陰翳に富み、闇と調和することか。また白味噌や、豆腐や、蒲鉾や、とろろ汁や、白身の刺し身や、ああいう白い肌のものも、周囲を明るくしたのでは色が引き立たない。第一飯にしてからが、ぴかぴか光る黒塗りの飯櫃に入れられて、暗い所に置かれているほうが、見ても美しく、食欲をも刺激する。あの、炊きたての真っ白な飯が、ぱっと蓋を取った下から温かそうな湯気を吐きながら黒い器に盛り上がって、一粒一粒真珠のようにかがやいているのを見る時、日本人なら誰しも米の飯のありがたさを感じるであろう。かく考えてくると、われわれの料理が常に陰翳を基調とし、闇というものと切っても切れない関係にあることを知るのである。

**7 漱石先生** 夏目漱石、一八六七―一九一六年。七四ページ参照。『草枕』は一九〇六年発表の作品。

**4** 「瞑想的」とはどのようなことか。

●理解●―(1)筆者が論じる「漆器」(一五二・8)と「陶器」(一五三・3)との違いは何か、整理しなさい。
(2)「蒔絵を画く時」(一五四・2)に「金色を贅沢に使」(同・3)うのはなぜか、説明しなさい。
(3)「吸い物椀」(一五五・1)の魅力を筆者はどのように説明しているか、まとめなさい。
(4)「日本料理」(一五六・12)の色彩について筆者はどのように述べているか、まとめなさい。

―〈合奏〉〈賛美〉〈基調〉